

日本の「男性／女性らしさ」に関する コミュニケーション学的考察

家庭内のコミュニケーションに焦点を当てて

A Communication Study on “Masculinity” and “Femininity” in Japan: In Light of Family Communication

渡 邊 陽 大 *

Haruto WATANABE

要旨

本稿は、日本家族におけるコミュニケーションを通じた「男性らしさ」、「女性らしさ」の形成過程を、ジェンダー理論と家族構造の変遷、そして家庭内のコミュニケーションプロセスに着目しながら考察する。先行研究の理論整理と具体例分析を通じて、家族内の日常的な言語・非言語コミュニケーションが、意識的、または無意識的に性別役割規範を伝達・再生産してきたことが明らかになった。特に、日本において家制度・近代家族・現代家族といった家族形態の変遷が、男性性（masculinity）の在り方と密接に結びついてきた点を指摘した。さらに、家族機能が情緒化し、ジェンダー役割意識が流動化する現代において、家族間コミュニケーションの変容が持つ意義について論じた。ジェンダーを「語り」や「やりとり」の中で捉え直す上で、コミュニケーション学的視点は社会制度やイデオロギーを超えた、実践的に「らしさ」を再考する上での道筋を提示するものである。

1. はじめに

本稿の目的は、「男性らしさ」や「女性らしさ」といった性別的役割について、家庭内のコミュニケーションに焦点を当てて再考することである。これらの「らしさ」は、誰もが日常的に耳にし、意識的に実践したり、または無意識のうちに影響を受けていたりする概念である。特に家庭という子どもの社会化¹が進む最初の場において、「らしさ」は主に両親や兄弟姉妹との関わりの中で形成されていく（干川, 1991; Braithwaite et al, 2025）。例えば、「男の子なんだから泣かないの」、「女の子なんだから優しくしなさい」といったメッセージに象徴されるように、家庭内のやりとりは性別に関する価値観や期待を自然な形で伝えている場合がある。

このような性別的役割は、長い間「当然のもの」として扱われてきたが、近年ではそうした前提自体に

* わたなべ はると 外国語学研究科外国語学専攻修士課程
指導教員：宮原 哲

¹ コミュニケーションを通じて、社会の価値観・規範・行動様式・言語・役割などを身につけていく過程（干川, 1991）。

疑問が投げかけられている。加えて、性別役割の形成には家庭内での親子間コミュニケーションが大きく影響していると考えられる。特に、親が性別に対してどのような価値観を持ち、それをどのように子どもに伝えているかによって、子どものジェンダー観は大きく左右される。

例えば、Rittenour, Colaner, and Odenweller (2014) は、性別に関する母親と娘の間のコミュニケーションが、性別に対する娘の意識に与える影響を調査した。彼女らは、母親がフェミニスト的なアイデンティティを持っている場合、このアイデンティティが母娘間の性別に関するコミュニケーションにどのように調整的役割を果たすのかに重きを置いた。研究の結果、母親が強いフェミニスト的価値観を持つ場合、娘に対してより柔軟で開かれた性別に関する視点を伝える傾向があり、娘は性別に基づく制約にとらわれず、自由な行動や自己表現を促進するようになることが明らかとなった。母親がフェミニストとしての考えを持っていると、娘の性別に対する考え方や行動に強く影響を与えることが分かる。その結果、娘は性別にとらわれず、もっと自由で柔軟な見方を持つようになると言える。

加えて Todaka (2023) は、母親が息子に料理や掃除などの家事を教える頻度が高いほど、息子が性別に対してより平等な考え方を持つ傾向があることを明らかにした。特に、息子が「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という伝統的な性別役割分業を支持する度合いが低くなることが確認された。この結果から彼女は、性別役割観は生まれつきではなく、後天的に家庭という環境によって形成され、母親からの家事教育がその形成に重要な役割を果たすことを主張している。一方、女子に関しては、母親からの家事教育が娘の性別役割観に有意な影響を与えないことを示した。Todaka (2023) は、性別に関する考え方は家庭でのしつけや教育によって身につくものであり、特に男の子にその影響が強く表れることを明らかにしている。

一方、Odenweller, Rittenour, Myers, and Brann (2013) は、父親と息子の間でのコミュニケーションの様式が、息子のジェンダー観（性別役割への考え方）にどのような影響を与えるかを分析している。彼女らによれば、息子には、父親の価値観を模倣する（modeling）場合と、それに反発して補償的に異なる価値観を持つ（compensation）場合の2つのタイプがあることを指摘している。具体的には、会話志向型の家庭で育った息子は平等的なジェンダー観を持ちやすく、同調志向型の家庭では伝統的なジェンダー観を持ちやすい傾向があるという。これらの観察から、父親息子間の対話のあり方が、息子のジェンダー意識の形成に大きな影響を与えることが分かる。

また、Klann, Wong, and Rydell (2018) は、父親の権威主義的な育児スタイルが、息子のジェンダー役割への態度や男性性アイデンティティの葛藤にどのような影響を及ぼすかを調査した。その結果、権威主義的な父親のもとで育った息子は、伝統的なジェンダー観を持ちやすく、「男らしさ」に対する心理的な葛藤をより多く抱える傾向があることがわかった。また、父子間の関係性の質がこの影響を和らげる可能性も示され、父親の育児スタイルが、息子の性別意識や心理的な男性性の形成に重要な役割を果たすことが示唆された。

これらを総合すると、家庭内での親子のコミュニケーションは、性別役割の再生産または変容の場として重要であると言える。とくに、親が無意識に送る言語的・非言語的メッセージが、性別に関する価値観を次世代へと伝達する回路となっている可能性がある（Wood, 2003; 2019）。そのため、性別役割が「自然なもの」とされてきたこれまでの前提自体を見直すには、家庭という日常的な場における親子間の対話の再考が不可欠である。

しかし日本において、こうした議論の多くは、社会学や心理学の視点から論じられることが多い（浅沼, 2019; 伊藤, 2000; 上野, 1990; 木下, 2019; 多賀, 2019; 土肥, 2011; 藤田, 2015）。また、家庭内における日常的なコミュニケーションに着目した研究も、欧米の家族を対象とした研究は多くあるものの（Arias & Punyanunt, 2017; Braithwaite, Schrodtt, Warner, & Galvin, 2025; Floyd & Morman, 2000; Odenweller, Rittenour, Myers, & Brann, 2013; Tannen, 2019; Wood, 2019）、日本の観点から論じた研究はまだ十分とは

いえない。特に、コミュニケーション学において重視される“Symbolic interactionism” (Mead, 2019) の観点からは、言語や非言語的なメッセージのやりとりを通じて、家族内で性別役割に関する意味づけがどのように形成・再生産されているのかを明らかにすることが重要である。こうした視点は、日本の文化的背景に根ざした性別観や家族観を捉えるうえで、他国の研究とは異なる独自の知見を提示しうる。本稿では、日本の家庭内で交わされる言葉や態度がどのように「らしさ」を形成し、それがときには再生産され、あるいは変化していくのかを探る。特に日本の家族における文化的背景や社会的な変化も視野に入れながら、性別的役割に関する認識が家庭内でどのように語られ、受け継がれているのかを、以上のようなコミュニケーション学的な観点から検討する。

本稿の構成は以下の通りである。2章では、家族とジェンダーに関する基本的な枠組みを整理する。3章では、日本家族におけるジェンダー的役割の特徴を歴史的観点から概観する。4章では、日本の家庭内のコミュニケーションを通じて「男性らしさ」や「女性らしさ」がどのように語られているかについて具体例を交えながら考察する。加えて、それらを欧米のものと比較し考察を行う。5章では、現代の変化に即した新たな家族像の可能性を検討し、コミュニケーション学的視点からのアプローチの提案を行う。6章で結論を述べる。

2. ジェンダーと家族内のコミュニケーション

2.1 ジェンダーの社会性や語りに着目した視座

Gergen (1991) は、社会心理学の立場から、現代社会における自己は社会的相互作用によって形成されると論じた。そのため、ジェンダーもまた、固定された属性ではなく、複数の社会的期待や文化的語りに応じて変化し、揺れ動くものとしての視点を Gergen (1991) は提案している。この立場は、ジェンダーを先天的な性質ではなく、相互作用的なプロセスの産物とみなす点で重要である。

この Gergen の議論を哲学的にさらに掘り下げたのが、Butler (1999) である。Butler は、ジェンダーは生まれつきの性質ではなく、繰り返される言語行為や身体行為 (performativity) によって構成されるとする。つまり、人は特定のジェンダー規範に沿った行動を演じ続けることによって、次第に「男性的」、「女性的」と認識されるに至るのである。この点で、Butler は Gergen と同様にジェンダーの社会的構築性を認めつつ、よりパフォーマンスに注目している点で独自性を持つ。

一方、コミュニケーション学の分野では、Tannen (1986; 2019) が男女のコミュニケーションスタイルの違いに着目している。中でも、Tannen (2019) は、男性は“report talk” (情報伝達を目的とする会話) を、女性は“rapport talk” (関係構築を目的とする会話) を行う傾向があると指摘した (pp. 438-441)。彼女の議論は、「男女の会話スタイルの違い」は、成長過程における社会的学習や文化的期待から生まれるものだとし述べており、性差がまったく存在しないとは言えないが、それよりも社会的にどう学ばれるかが重要であるという立場をとる。つまり、社会的文脈によって言語使用が強化・維持されることを示唆しており、ジェンダーにおけるコミュニケーションスタイルの差異に光を当てている。

“report talk” や “rapport talk” は、家庭内や職場における男女間でのコミュニケーションによるすれ違いを説明する枠組みとして一定の影響を持ってきたが、近年ではその限界が垣間見える。この二分法は、実際の人間のコミュニケーション行動が文脈や状況、人間関係によって柔軟に変化するという事実を十分に反映していない。感情の共有や共感的な語りは、決して女性に限られたものではなく、男性にとっても重要な関係形成の本質的なものである。実際、現代の日本社会においては、育児や家庭生活に積極的に関わる父親が増え、そうした場面では “report talk”、そして “rapport talk” を行う男性も少なくない。コミュニケーションスタイルを性別によって一義的に分類することは、かえって性役割ステレオタイプを強化し、ジェンダーの流動性を捉える上では不十分である。

このような課題を踏まえ、Wood (2003; 2019) は、ジェンダーは単なる社会構築物ではなく、コミュニケーション行為を通じて習得され、再生産されると論じた。Wood によれば、人は家庭や学校、メディアといった場面で交わされる無数のやりとりの中で、性別に「ふさわしい」振る舞いや言語表現を学んでいく。したがって、ジェンダーは単に与えられるものではなく、日常的な対話やふるまいの積み重ね、つまりヒトのコミュニケーション活動を通して形作られるのである。

このように、社会心理学者や哲学者がジェンダーを社会的構築物や行為の産物として論じてきたのに対し、コミュニケーション学者である Wood は、「コミュニケーション」という具体的なプロセスに注目することで、ジェンダー形成をより流動的に把握する視点を提供している。本稿ではこの Wood の立場に依拠し、家庭内の日常的なコミュニケーションが「男性らしさ」や「女性らしさ」の学習と再生産にどのように関わるかを明らかにしていく。

2.2 日本家族の枠組み「らしさ」の形態・変遷

明治時代に入り国家による法制度の整備が進む中で、「家」は法的な制度として明確に位置づけられた(明治民法1898年施行)。明治期に確立された家制度は、男性性を家父長制と強固に結びつける枠組みとして機能した。村社会を統治する単位としての「家」は、単なる親族の集合ではなく、経済的・政治的役割を担う統治機関でもあった(木下, 2009; 原・金原, 2007)。この中で家長である男性は、家族を養い、財産を管理し、村との関係を維持する責任を負った。そのため、男性は「外」とつながる存在、女性は「内」ととどまる存在として役割分担され、長男は幼少期から家業を継ぐための男らしさを内面化させられた。この体制の中で形成された男性性は、支配、責任、経済的自立といった価値観と強く結びついていたことが伺える。

戦後、家制度の廃止と共に、日本は近代家族モデルへと移行する(保坂, 2009)。産業化と高度経済成長に伴い、仕事は「家の外」で行うもの、家庭は「癒やしと支えの場」とする性別役割分業が進んだ。この過程で、男性は企業社会においても「家長」としてふるまうことが期待されるようになった(上野, 1990)。企業組織そのものが「擬似家族」となり、長期雇用・年功序列のもとで家父長的な秩序が再生産されたのである(木下, 2009)。この構造のもと、男性性はさらに賃労働・経済的供給能力と結びつき、家内での支配的地位を正当化する根拠ともなった(Illich, 1981)。家制度は形式的に消えたものの、家父長制的男性性は形を変えて継続したといえる。

しかし、1970年代末以降、少子化、女性の社会進出、個人主義の浸透といった社会変動の中で、近代家族モデルは次第に揺らぎ始める(落合, 2019; 2022)。家族の機能は経済的役割から情緒的な結びつきへとシフトし、今日では「安らぎ」や「絆」といった情緒的機能が重視される傾向が見られる(園井, 2009; 内閣府, 2024)。この過程で、従来男性に求められていた「外で稼ぎ、家族を養う」という絶対的役割は相対化され、男性性のあり方も変容を迫られている。育児に積極的に関与する「イクメン」という言葉の広がりや、こうした男性性の変化を象徴している一方で、依然として残存する伝統的規範との緊張も内包している(多賀・石井・伊藤・植田, 2023; 異, 2022)。

このように、日本社会における男性性は、家族構造の変化に密接に呼応しながら形成・再編されてきた。Wood (2003) は、アメリカ社会において、男児は女児よりも強く「男性らしく」あることを求められ、性別役割の社会化が進む傾向にあると指摘している(pp. 162-163)。これは日本においても同様の傾向が見られる可能性を示唆するものであり、性別役割の内面化過程における親の関与のあり方を考える上で重要な視座を提供している。とりわけ現代の日本では、家庭の機能が情緒的な結びつきを重視する方向へと変化するなかで、家庭内のコミュニケーションが新たな男性性をめぐる葛藤や交渉の場として、以前にも増して重要な意味を持つようになっている(多賀・石井・伊藤・植田, 2023)。

本稿では、こうした観点から、家庭内でどのようなやりとりを通じて男性性や女性性が語られ、再生産

され、あるいは変化していくのかを、日常会話や親子間の語りといったミクロなコミュニケーションに焦点を当てて考察していく。とりわけ、意味のやりとりを通じて、人が自己や他者のジェンダーをどのように理解・構築していくのかを明らかにする点に、コミュニケーション学のアプローチの特徴がある。

3. 日本家族におけるジェンダーの役割

3章では、日本社会における家族内ジェンダー役割の特徴を整理する。特に、家庭という最小単位のコミュニケーション空間において、「男性らしさ」や「女性らしさ」がどのように形成され、再生産されてきたかに注目する。

日本家族におけるジェンダー役割は、社会文化的文脈と深く結びつきながら、欧米諸国とは異なる独自のパターンを示してきた。まず、日本の家族において「男らしさ」は、強さ、責任感、経済的自立と結びついてきた。家制度下では家長としての責務を負う長男が特別な位置を与えられ、幼少期から「泣くな」、「弱音を吐くな」という言語指導を通じて、感情表現の抑制と自己犠牲的精神が育まれた（木下，2009）。これにより、感情的な脆さを見せることは「男らしくない」とみなされる文化が定着した。

一方で「女らしさ」は、従順さ、やさしさ、内助の功といった価値観と結びついてきた。家父長制的家族観のもと、女性には家庭内の支え手として、表に出ることなく家族の和を保つ役割が期待されてきた（落合，2022）。こうした価値観は、親から子への語りかけやしつけ、日常会話の端々に現れ、次世代へと受け継がれてきただけでなく、時には意識的に受け入れられたり、内面での葛藤や再解釈を経て強化・変容されたりするかたちで、相互作用的に再生産されてきた。

戦後、近代家族化が進む中でも、こうした性別役割期待は容易には消えなかった。特に、学校教育やメディア表象においても、「男子はリーダーシップをとるべき」、「女子は思いやりを大切に」といったメッセージが反復され、家庭外からもジェンダー規範が補強された（小山，2009；中野，2024）。

家族における性別の役割期待は、日本に特有なわけではないが、日本では家族主義的価値観や共同体重視の文化が、ジェンダー規範をより強固に保持・伝達する役割を果たした点が特徴的である（江原，2013；山根，1998）。すなわち、日本家族は個人よりも家族単位を重視するため、個人の自由な自己表現よりも、家族の期待に応じたジェンダー行動が求められる傾向が強かったといえる。

以上のように、日本における家族内ジェンダー役割は、歴史的・文化的背景の中で根強く形成され、意識的、ないしは無意識的な言語行動によって再生産されてきた。次章では、実際の家庭内のコミュニケーションに見られる「男性らしさ」、「女性らしさ」の具体的表現を取り上げ、そのあり方をより詳細に検討していく。

4. 家族間コミュニケーションを通じた「男性らしさ」、「女性らしさ」の具体例

4章では、家族内の具体的な言説が、いかにして「男性らしさ」や「女性らしさ」といった性別的役割認識を形成し、再生産しているのかについて、言語的・非言語的コミュニケーションの具体例を通じて整理・考察する。先行研究では、感情表現の抑制、性別に基づく言語指導、進路への示唆、家庭内役割分担、非言語的態度などが、性別役割の学習における主要なメカニズムとして指摘されてきた（伊藤，2000；多賀，2019；土肥，2011；藤田，2015；Todaka，2023 など）。本章では、こうした実証的知見をもとに、日本の家庭において見られる代表的な5つのコミュニケーション・パターンに分類し、それぞれがジェンダー意識の形成に果たす役割を検討する。また欧米家族との比較も行い、日本の家庭内コミュニケーションにおけるジェンダーアイデンティティ獲得の特徴を描き出す。

まず、先行研究を整理し、5つのコミュニケーション・パターンに分類したのが以下の表1である。

表1 コミュニケーション・パターンによる分類

パターン	例	主な引用文献
① 感情表現抑制	「泣くな」、「我慢しろ」など、男児に対する感情抑制の言語行動	- 伊藤 (2000) - 多賀 (2019) - Connell & Messerschmidt (2005) - Floyd & Morman (2000)
② 役割期待の言語化	「男の子だからしっかり」、「女の子は優しく」などの言語による性別役割指導	- 藤田 (2015) - Colaner & Rittenour (2015)
③ 進路選択におけるジェンダー的示唆	「男子は理系」、「女子は文系」などの進路に関する性差助言	- 土肥 (2011) - 中野 (2024) - Odenweller et al. (2013)
④ 家庭内役割分担	「男子はゴミ出し、女子は台所を手伝う」などの行動指示	- Todaka (2023)
⑤ 無言の期待と非言語メッセージ伝達	父は無口・厳格、母は情緒的支援、など非言語的に性別役割を伝える	- 多賀・石井・伊藤・植田 (2023) - Smith, Freeman, & Zabriskie (2009) - Stohl (1989)

以下4.1節では、各コミュニケーション・パターンに具体例を見ながら、先行研究を整理する。

4.1 日本家族における具体的な言説

(1) 感情表現の抑制

家庭内における「男の子なんだから泣かないで」、「我慢しなさい」といった発言は、男児に対して感情の抑制を促す典型的な例である。伊藤 (2000) と多賀 (2019) は、現代日本における男性性の特徴として、感情表現の抑制や対人関係における強さが社会的に期待されていると指摘している。こうした家庭内の言語的・非言語的なメッセージは、子どもに対して「感情を表に出さないことが男性らしさである」という価値観を内面化させる可能性がある。また、父親が感情表現を避ける態度そのものが、非言語的な学習の対象となり、子どもの性別役割観に強く影響を及ぼす。Connell and Messerschmidt (2005) が提唱する「覇権的男性性 (hegemonic masculinity)」は、こうした感情抑制、強さ、責任といった価値を男性性の中核としており、家庭内のコミュニケーションがその内面化に大きく関与する。加えて Floyd and Morman (2000) は、父から息子への感情表現の不足が、息子の感情表現や親密性の抑制につながる可能性を示しており、言葉だけでなく態度やふるまいを通じた期待もまた、性別役割の学習に影響を与えているといえる。

(2) 役割期待の言語化

「男の子だからしっかりしなさい」、「女の子は優しくしなさい」といった発言は、子どもに対して性別に応じた役割を明確に提示する言語的コミュニケーションである。土肥 (2011) は、母親の性別役割期待が兄弟構成によって異なることを示し、特に長男にはリーダーシップや責任感が、長女には気配りや従順さが期待される傾向があると報告した。このような言語による役割付けは、子どもに特定の性別「らしい」ふるまいを学習させ、固定的なジェンダー観を育てる要因となる。また、藤田 (2015) は、家庭内での家事分担が女子大学生の性別役割意識に関連していることを報告している。さらに、Colaner and Rittenour (2015) は、親のジェンダー観が子どもの将来のキャリア選択や自己表現にも長期的に影響することを示しており、日常の語りの影響力の大きさを裏づけている。

(3) 進路選択におけるジェンダー的示唆

例えば「男子は理系が向いている」「女子は文系のほうが良い」といった家庭内の示唆は、進路に関する性別的期待の現れである。土肥 (2011) は、親や祖父母が息子には「自立的で積極的な性格」を、娘には「思いやりがあり周囲と協調できる性格」を望む傾向があり、子どもたちもそうした期待に沿ったふるまい

をする傾向があることを明らかにした。こうした言説は、子どもの自己効力感や職業選択の幅を無意識のうちに制限する可能性をはらんでおり、親や周囲の大人が、男の子には積極性や自立性を、女の子には思いやりや協調性を求める傾向は、子どもたちの行動にも影響を与えるだけでなく、将来的な自己評価や進路の選択肢にも大きな影響を与える可能性がある。実際、中野（2024）は、女子生徒が理系進路を選ぼうとすると、友人や教師に驚かれたり思いとどまるよう助言されたりするなど、進路選択の場面でもジェンダーに基づく無意識の期待が表れることを指摘している。さらに、Odenweller et al. (2013) の研究でも、父親の価値観が息子に模倣、あるいは反発的補償という形で内面化されることが示されており、性別に関する家庭内言説が、単なるアドバイスにとどまらず、ジェンダーアイデンティティの形成と結びつく複雑なプロセスであることが明らかになっている。

（4）家庭内役割分担の指示

家庭内で「お兄ちゃんはゴミ出し」や「お姉ちゃんはお皿を洗って」といった指示がなされることは、性別に基づいた役割分担の一環である。Todaka (2023) は、母親による家事教育の実践が子どもの性別役割観に与える影響を分析し、息子に対しても積極的に家事教育が行われる家庭では、より平等志向なジェンダー意識が育まれる可能性が高いと報告している。つまり、家庭内の役割分担における言語的・非言語的な指導が、ジェンダー認識の在り方を大きく左右しているといえる。こうした言葉は、男児には公共的領域での行動、女児には家庭内での補助的役割を担うべきという暗黙の規範を内在化させる。このことは、家庭内での言語的・行動的関与が、性別役割の学習内容に直接的な影響を及ぼしていることを示している。

（5）無言の期待と非言語的伝達

家庭内において、父親は無口で厳格、母親は感情的な支援を担うという非言語的な構図は、性別役割を言葉以外の形で伝達している。多賀・石井・伊藤・植田 (2023); 伊藤 (2000) らは、日本の父権的文化の中で、沈黙や厳格さが男性らしさと結びつけられているとし、子どもは親の態度を通じて性別に応じたふるまいを無意識に学習するとしている。このような非言語的コミュニケーションは、言語による直接的教育とは異なり、自然な模倣のかたちで内面化されやすいため、その影響は長期的かつ根深いものとなる。Smith, Freeman, and Zabriskie (2009) は、言葉を使わない態度やしぐさ、沈黙などの非言語的コミュニケーションが、子どもにとって性別にふさわしい行動の手本として作用する可能性があることを指摘している。

また、Stohl (1989) は、子どもが親の態度やふるまいを観察し、それを通じて社会的スキルや価値観を学ぶ過程を重視しており、非言語的メッセージもジェンダー社会化における重要な要素であることがわかる。このような非言語的な役割分担は、言語による直接的な指導がなくとも、「男性は感情を見せずに責任を担う存在」、「女性は感情を通じて支える存在」という性別イメージを子どもに自然と内面化させる要因となる。

以上、先行研究を、5つのコミュニケーション・パターンに整理し、その詳細を概観した。以下、4.2節では、これらの分類を踏まえ、日本と欧米との家族におけるコミュニケーションにおける差異を踏まえながら、考察を行う。

4.2 欧米家族との比較

本節では、先に整理した5つのコミュニケーション・パターンに基づき、欧米諸国の家族との比較を行う。欧米においても性別役割の影響は存在するが、日本社会は相対的に、周囲との調和や関係性の維持を重視する傾向が強く、性別役割もこうした文脈の中で内面化されやすい。一方、欧米諸国では、より個人の選択や自立性が強調される中で、性別役割に対する受け止め方にも違いが生じている可能性がある。

(1) 感情表現の抑制

欧米では、子どもの健全な情緒発達のために、感情を言語化して表現することが推奨される傾向にある。特に、父親が息子に対して積極的に愛情や感情を示すことが、子どもの情緒安定や親密性の発達に寄与するという研究が存在する (Floyd & Morman, 2000; Henry et al., 2019)。これに対し、日本では「男の子なんだから泣かないで」といった感情抑制が依然として多くの家庭で見られ、男子は幼少期から「感情を表に出さないことが男らしい」と学習しがちである。感情の表現に対する文化的規範の違いが家庭内のやり取りの違いに如実に反映されている。

(2) 役割期待の言語化

欧米においても性別に関する言説は存在するが、「男の子だからリーダーを」、「女の子だから優しく」といった直接的な言語化は、日本ほど強くはない傾向にある (Eagly & Wood, 2012)。欧米では、特に教育現場や家庭内において、個人の特性や好みを尊重する姿勢が重視され、親も無意識のうちに性別役割を押し付けることを避ける傾向が強まっている。一方、日本では今なお、家庭内の日常会話に性別による「ふるまいの期待」が織り込まれやすく、それが固定的なジェンダー意識の形成につながっている。

(3) 進路選択におけるジェンダー的示唆

欧米でも STEM 分野における男女比の偏りは課題となっているが、近年は教育現場や政策レベルでの改善努力が進んでいる (例: STEM for Girls)。親の期待についても、「娘は文系」、「息子は理系」といったステレオタイプな助言を避ける意識が浸透しつつある。一方、日本では親の進路助言に性別が大きく影響する傾向が依然として強く (土肥, 2011)、男子には理系・技術職、女子には文系・対人職という暗黙の期待も未だ根強く残っている。この違いは、職業観や将来設計に関する性別役割意識に長期的な影響を及ぼす。

(4) 家庭内役割分担の指示

欧米では、父親の家事・育児参加が一定程度進んでおり、共働き家庭では性別にかかわらず家庭内役割を共有する姿が一般化しつつある (Livingston & Parker, 2011)。その背景には、政策的支援や男女平等意識の浸透がある。これに対し、日本では性別に応じた家庭内役割の割り振りが今なお存在しやすい。こうした日常的な指示が、性別役割に対する暗黙の理解を子どもに内面化させる要因となっている。

(5) 無言の期待と非言語的伝達

Bem (1981) は、子どもの性別に関するスキーマは文化を通じて形成され、それが行動や自己理解に影響を与えると述べている。こうした枠組みは、しばしば親の態度やふるまいを通じて伝達されることから、性別役割の固定化を避けるには、大人がその影響に自覚的である必要があるとも示唆されている。一方、日本では父親の沈黙や母親の情緒的支援といった伝統的な非言語的構図が、特に意図せず再生産されやすい。子どもはこのような態度を自然に模倣することで、性別役割を無意識のうちに学習する傾向がある。

以上のように、欧米諸国においても性別役割分担は存在するが、欧米と日本の家族内コミュニケーションには、性別役割の形成における明確な違いが見られる。欧米では個人主義やジェンダー平等の理念に基づき、性別にとらわれない子育てを志向する傾向が強まっているのに対し、日本では言語・非言語行動を通じて、依然として伝統的な性別役割が再生産されやすい傾向がある。

5. 現代の変化に即した新たな家族像とジェンダー役割再考

本稿を通じて明らかになったのは、「男性らしさ」や「女性らしさ」といった性別役割が、家庭内の日常的なコミュニケーションによって、意識的に実践し、時に無意識のうちに形成・再生産されているという点である。ここで重要なのは、性別役割とは、ただ押し付けられるだけの存在ではなく、家族内の語りやふるまいの中で当たり前として繰り返され、その中で内面化されていくというプロセスである。

このようなミクロなやりとりに焦点を当てられたのは、まさにコミュニケーション学的視点をとったからである。他の社会的・心理学的アプローチが主に社会制度や意識構造に注目するのに対し、本稿では、人々がどのように「語り」、「振る舞い」、「応答」したり、されたりといった相互作用、特に日々のコミュニケーションプロセスの積み重ねに着目した。本研究の分析結果から、家庭内のコミュニケーションは性別役割の伝達にとどまらず、それに対する交渉や変容のプロセスが含まれる場であることが示唆された。

例えば、「男の子なんだから泣かないで」と言われた場面でも、子どもが感情を表現し、それを親が受け止め直すことで、「泣く＝男らしくない」という一方的なメッセージが揺さぶられることがある。このようなやりとりの中にこそ、固定的な「らしさ」を問い直す契機がある。ジェンダーは制度の中で一方的に押し付けられるものではなく、日常の語りと応答の中で再構成されうることが本稿は強調したい。

5.1節では、現代の家族とジェンダー役割をめぐる変化を整理し、5.2節で家族内でのコミュニケーションの変遷を探り、そして5.3節でコミュニケーション学的視点から新たな可能性を提示したい。

5.1 現代における家族とジェンダー意識の変容

近年、家庭に期待される役割は大きく変化している。内閣府（2024）の調査によれば、現代日本では家庭に対して「経済的基盤」や「子どものしつけ」といった伝統的機能よりも、「休息・安らぎ」や「家族の絆」といった情緒的機能への期待が高まっている。この変化は、性別に固有の役割を求める構造から、個人同士の感情的なつながりを重視する方向へのシフトを示している（園井，2009）。

同時に、男性に対する役割期待も流動化している。「イクメン」という言葉に象徴されるように、父親が育児や家事に主体的に関与する姿はもはや例外ではなくなりつつある（巽，2022）。これは、家父長制的な男性性から、共感性や情緒的支援能力をも含む新しい男性性への移行を示唆している。

5.2 家族内のコミュニケーションの変容とその意義

こうした社会変化は、家庭内のコミュニケーションのあり方にも影響を及ぼしている。従来の「男性は無口で厳格、女性は情緒的支援役」という態度やふるまいを通じて伝えられる性別役割のパターンが緩み、感情の共有や相互支援を促進するコミュニケーションも徐々に広がりつつある（山田，1999）。

例えば、父親が子どもに感情を言語化して伝える、母親が仕事に対する達成感を家族と共有する、といった日常的なやりとりは、性別に縛られない自己表現を可能にするコミュニケーション文化を醸成する。この過程において、家族はもはや性別役割に沿った期待を押しつける場ではなく、複数の異なる声や立場が互いに影響を与え合いながら形成される「対話的」な場へと変容しつつある。ここでいう「対話的」とは、単なる一方的な発話（モノローグ）ではなく、多様な意見や感情が交錯しながら新たな意味や関係性が創られていく相互作用を指す（Baxter & Bakhtin, 2019）。

5.3 コミュニケーション学的視点からの提案

本稿の検討により、家庭内の些細なやりとりが子どもの性別観の形成に大きな影響を与えていることが示された。「男の子なんだから」、「女の子なんだから」といった言葉は、家庭の中では時に何気なく交わされるが、その影響は想像以上に長く、深く子どもの内面に残り続ける。

性別役割は学校やメディアといった社会的言説からも影響を受けるが、特に家庭内における語り方や振る舞い方といったコミュニケーションそのものが、ジェンダーアイデンティティ獲得の基盤となっている。また、家庭内でのやりとりも、社会の広範な言説や価値観と無関係ではなく、両者は相互に影響し合いながら個人の性別意識形成に関わっている。このような認識は、コミュニケーション学が日常的な言葉の意味やその力学を詳細に分析する学問領域であるからこそ得られたものである。

他の学問的アプローチでは見落とされがちなこの視点である「語り」の中でジェンダーが作られている

という視点は、現代の柔軟なジェンダー観の構築において極めて重要であると考え。家族の中で、性別に関する期待を押しつけるのではなく、「どのように語るか」を問い直すことで、性別役割の再生産を食い止めることができる。言い換えれば、コミュニケーションのあり方そのものが、ジェンダーのあり方を変える力を持っているということだ。

したがって、コミュニケーション学の視点を活かしたアプローチは、固定的な「らしさ」から自由になり、より対話的で協働的な家族関係を築くうえでも有効である。この気づきは、今後の研究や実践においても大きな示唆を与えてくれるものである。

こうした視点に立つならば、本稿のように家族内の日常的なコミュニケーションの意味や過程に焦点を当て、深く理解することを目的とする研究においては、エスノグラフィーや半構造化インタビューなどの質的調査手法が特に有効であると考えられる。なぜなら、性別役割の内面化や変容は、量的指標やアンケート調査等の選択肢では到底捉えきれない、文脈依存的で多層的なプロセスだからである。例えば、親子間の何気ない会話や家庭内でのふるまいを丁寧に観察・記述することで、ジェンダーに関する「語り」のパターンや変化の兆しを掘り取ることが可能になる。一方で、性別役割意識の広がりや傾向を数値的に把握するためには、量的研究手法も重要な役割を果たすため、研究目的に応じて適切な方法を選択することが求められる。

コミュニケーションは、単に言葉をやりとりするだけの行為ではなく、発話の内容はもちろんのこと、沈黙、視線、話す順番といった非言語的な要素も含めた広義のメッセージのやりとりであり、その場の空気や関係性、過去の経験など多様な要因と密接に結びついている。こうした複雑なやりとりの実態を捉えるには、参与観察や語りの分析に基づく質的研究が不可欠である。今後、こうした方法論を取り入れながら、家庭内でのジェンダー構築のプロセスをより深く、かつ現実に即して明らかにしていくことが、実践的にも理論的にも意義のある取り組みとなるだろう。

6. 結論

本稿は、日本家族におけるコミュニケーションを通じた「男性らしさ」や「女性らしさ」の形成過程を、ジェンダー理論と家族構造の変遷に着目しながら検討してきた。

まず、ジェンダーが社会的構築物であるという視点を導入し、家族内での日常的なやりとりが性別役割の再生産にいかに関与してきたかを理論的に整理した。そのうえで、日本家族に特徴的な家制度・近代家族・現代家族の変遷をたどり、特に男性性がいかに家族構造と結びつきながら形成・維持されてきたかを明らかにした。

また、家族内の具体的な言語・非言語コミュニケーションに着目し、親の声かけや役割分担、非言語的な態度が、意識・無意識のうちにジェンダー規範を再生産してきたことを具体例を通じて示した。さらに、現代においては家族機能の情緒化や男性役割の流動化が進みつつあることにも注目し、これまでの固定的な「らしさ」が変容の局面を迎えていることを指摘した。

本稿がとりわけ強調したいのは、こうしたジェンダー役割の形成・変容は、社会制度や経済構造といったマクロな要因だけでは十分に捉えきれないという点である。むしろ、家族というミクロな場における日常的なコミュニケーションの積み重ねこそが、ジェンダー意識の基盤を作り、また変えていく鍵を握っている。

この意味で、コミュニケーション学の視点は不可欠である。制度やイデオロギーを上から批判するだけでなく、日常的な語りかけ、態度、感情表現といった具体的なやりとりの中にジェンダー規範がどのように生まれ、再生産され、変容していくのかを捉えることこそが、本質的なジェンダー平等の実現や「らしさ」というジェンダーアイデンティティ再考に向けた第一歩となる。

また、本稿にはいくつかの限界がある。第一に、本稿では家族内コミュニケーションの実態を示す実証的データを用いていない点が挙げられる。今後は、インタビュー調査やエスノグラフィーを通した「生の声」を実際に扱うことでより日常に沿ったコミュニケーションプロセスを知ることが可能である。第二に、「家族」という枠組み自体が異性愛中心的なモデルに依拠している側面を持つため（元山，2023）、多様な家族形態への適用可能性には未だ課題が残る。第三に、本稿に登場する「日本」という概念だが、日本といても指す範囲がとて広く曖昧であるため、ジェンダー、年齢、社会的地位、地域間などによって文化差があることを考慮すべきである。例えば九州内の中でも「九州男児」や「薩摩 student」といったような「男児」を表す言葉は存在しており、ひとくくりに「日本」とまとめるのは疑問が残る。

今後の展望としては、家族内で交わされるコミュニケーションを対象とした質的研究を深化させ、ジェンダー規範の形成・変容プロセスをより精緻に明らかにしていくことが求められる。また、多様な家族構成を視野に入れた研究を通じて、より包摂的なジェンダー論の構築を目指す必要がある。

ジェンダーは、「語られるもの」であり、日々のコミュニケーション活動の中から生まれるものである。したがって、私たち自身が日常的なコミュニケーションを問い直し、変えていく努力を積み重ねることが、「らしさ」の再考に向けた最も根本的な実践であると考えられる。

謝辞

本論集をまとめるにあたり、多大なるご指導とご助言を賜りました指導教授 宮原哲先生に、心より感謝申し上げます。先生の温厚かつ的確なご指導の賜物として、本論集を無事にまとめ上げることができました。

また、本論文に関して貴重なご助言をくださった清宮徹先生にも、深く感謝申し上げます。的確な指摘と温かい励ましにより、本研究をより深めることができました。さらに、研究の過程において貴重な助言と励ましをくださった郭仁敬先輩、川井田健斗先輩、若芝青先輩（五十音順）に深く感謝申し上げます。先輩方の温かいご助力に支えられ、未熟な私も少しずつ学びを深めることができました。

加えて、日々の議論や意見交換を通じて刺激を与えてくれた同僚の皆さま、資料の収集や調査にご協力くださったすべての方々にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。本論集は、多くの方々のご支援のもとに完成したものであり、ここに心より感謝の意を表します。

参考文献

- 浅沼祐治（2019）『父子家庭の父親の養育困難—父親の語りにおける父・娘関係に着目して』東海社会学会年報17，85-98.
- 伊藤公雄（2000）『男性学入門—Introduction to Men's Studies』作品社.
- 上野千鶴子（1990）『家父長制と資本制』岩波書店.
- 江原由美子（2013）『フェミニズムと家族』社会学評論64(4)，553-571.
- 落合恵美子（2019）『21世紀家族へ』有斐閣.
- 落合恵美子（2022）『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
- 釜野さおり（2008）『レズビアン家族とゲイ家族から従来の家族を問う可能性を探る』家族社会学研究20(1)，16-27.
- 木下謙治（2009）「家族とは何か」木下謙治・保坂恵美子・園井ゆり（編）『家族社会学—基礎と応用』（pp. 3-11）九州大学出版会.
- 小山静子（2009）『戦後教育のジェンダー秩序』大月書店.
- 多賀太（2019）『男性学・男性性研究の視点と方法—ジェンダーポリティクスと理論的射程の拡張』国際ジェンダー学会誌17，8-28.
- 多賀太・石井クンツ昌子・伊藤公雄・植田晃博（2023）『ケアする男は「男らしい」のか』家族社会学研究35(1)，7-19.
- 巽真理子（2022）『子育てというケアとイクメンの男らしさ—ケアリング・マスキュリティについての一考察—』社会学評論72(4)，450-466.
- 土肥伊都子（2011）『家族内のジェンダーの社会化に関する実証的検討—世代間の関連ときょうだい構成に注目して』家族心理学研究25(1)，1-12.

- 園井ゆり (2009) 「現代の家族問題」 木下謙治・保坂恵美子・園井ゆり (編) 『家族社会学 - 基礎と応用』 (pp. 99-109) 九州大学出版会.
- 内閣府政府広報室 (2024) 『「国民生活に関する世論調査」の概要』 <https://survey.gov-online.go.jp/202412/r06/r06-life/gairiyaku.pdf> (2025年5月19日最終閲覧)
- 中野円佳 (2024) 『教育にひそむジェンダー』 筑摩書房.
- 原真由美、金原俊輔 (2007) 『現代家族における「かたち」と「こころ」についての考察』 現代社会学部紀要5(1), 37-42.
- 干川剛史 (1991) 『社会化とコミュニケーション: J・ハーバーマスのコミュニケーション的行為論を手がかりにして』 社会学評論42(2), 140-154.
- 藤田智子 (2015) 『家事分担から見る女子大生の性別役割分業意識と親へのイメージ』 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 II 66, 387-395.
- 保坂恵美子 (2009) 「家族の変動」 木下謙治・保坂恵美子・園井ゆり (編) 『家族社会学—基礎と応用』 (pp. 13-28) 九州大学出版会.
- 元山琴菜 (2023) 『「家族」を手放し、生きる基盤をつくる実践』 家族社会学研究35(1), 62-75.
- 山田昌弘 (1999) 『家族のリストラクチャリング—21世紀の夫婦・親子はどう生き残るか』 新曜社.
- 山根真理 (1998) 『家族社会学におけるジェンダー研究の展開』 家族社会学研究10(1), 5-29.
- Arias, V. S., & Punyanunt-Carter, N. M. (2017). Family, culture, and communication. *Oxford Research Encyclopedia of Communication*. Oxford University Press.
- Baxter, L., & Bakhtin, M. (2019). Relational dialectics theory. In E. Griffin, A. Ledbetter, & G. Sparks (Eds.), *A first look at communication theory* (pp. 131-144). NY: McGraw-Hill Education.
- Bem, S. L. (1981). Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*, 88(4), 354-364.
- Braithwaite, D. O., Schrodtt, P., Warner, C., & Galvin, K. M. (2025). *Family communication: Cohesion and change*. NY: Routledge.
- Butler, J. (1999). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. NY: Routledge.
- Colaner, C. W., & Rittenour, C. E. (2015). "Feminism begins at home": The influence of mother gender socialization on daughter career and motherhood aspirations as channeled through daughter feminist identification. *Communication Quarterly*, 63(1), 81-98.
- Connell, R. W., & Messerschmidt, J. W. (2005). Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept. *Gender and Society*, 19(6), 829-859.
- Eagly, A. H., & Wood, W. (2012). Social role theory. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of Theories of Social Psychology* (Vol. 2, pp. 458-476). SAGE Publications Inc.
- Floyd, K., & Morman, M. T. (2000). Affection received from fathers as a predictor of men's affection with their own sons: Tests of the modeling and compensation hypotheses. *Communication Monographs*, 67(4), 347-361.
- Gergen, K. J. (1991). *The saturated self: Dilemmas of identity in contemporary life*. NY: Basic Books.
- Gubrium, J. F., & Holstein, J. A. (1990). *What is family?* California: Mayfield Publishing Company.
- Henry, J. B., Julion, W. A., Bounds, D. T., & Sumo, J. (2019). Fatherhood matters: An integrative review of fatherhood intervention research. *The Journal of School Nursing*, 36(1), 19-32.
- Illich, I. (1981). *Shadow work*. Boston; London: Marion Boyars Publishers Ltd.
- Klann, E. M., Wong, Y. J., & Rydell, R. J. (2018). Firm father figures: A moderated mediation model of perceived authoritarianism and the intergenerational transmission of gender messages from fathers to sons. *Journal of Counseling Psychology*, 65(4), 500-511.
- Levant, R. F. (1992). Toward the reconstruction of masculinity. *Journal of Family Psychology*, 5(3-4), 379-402.
- Livingston, G., & Parker, K. (2011). A tale of two fathers: More are active, but more are absent. Pew Research Center.
- Mahalik, J. R., Burns, S. M., & Syzdek, M. (2007). Masculinity and perceived normative health behaviors as predictors of men's health behaviors. *Social Science & Medicine*, 64(11), 2201-2209.
- Mead, G. H. (2019). Symbolic interactionism. In E. Griffin, A. Ledbetter, & G. Sparks (Eds.), *A first look at communication theory* (pp. 53-64). NY: McGraw-Hill Education.
- Miyahara, A. (2023). De-westernizing the conflict management model: Is "avoidance" really that bad?. In X. Dai, & G.-M. Chen, *Conflict management and intercultural communication: The art of intercultural harmony* (pp. 150-166). NY: Routledge.
- Odenweller, K. G., Rittenour, C. E., Myers, S. A., & Brann, M. (2013). Father-son family communication patterns and gender ideologies: A modeling and compensation analysis. *Journal of Family Communication*, 13(4), 340-357.

- Rittenour, C. E., Colaner, C. W., & Odenweller, K. G. (2014). Mothers' identities and gender socialization of daughters. *Southern Communication Journal*, 79(3), 215-234.
- Smith, K. M., Freeman, P. A., & Zabriskie, R. B. (2009). An examination of family communication within the core and balance model of family leisure functioning. *Family Relations*, 58(1), 79-90.
- Stohl, C. (1989). Children's social network and the development of communicative competence. In J. F. Nussbaum (Ed.), *Lifespan communication: Normative process* (pp. 53-77). Lawrence Erlbaum Associates.
- Tannen, D. (1986). *That's not what I Meant!: How conversational style makes or breaks your relations with others*. NY: William Morrow and Company Inc.
- Tannen, D. (2019). Genderlect styles. In E. Griffin, A. Ledbetter, & G. Sparks (Eds.), *A first look at communication theory* (pp. 384-395). NY: McGraw-Hill Education.
- Todaka, M. (2023). The influence of mothers' housework teaching on children's view on gender roles. *Annals of Family Studies*, 48, 59-74.
- Wood, J. T. (2003). *Gendered lives: Communication, gender, and culture*. Belmont, CA: Wadsworth/Thomson Learning.
- Wood, J. T. (2019). *Gendered lives: Communication, gender, and culture*. Boston, MA: Cengage.